

サビエル生誕五百年



8日間の黙想

結婚してもう四十一
 年が過ぎた。これだけ
 長い年月をともに生活
 しておきながら、妻が

何を悲しみ何を喜び、
 何を考えているのか相
 手の立場になって考え
 たことはあまりない。

身勝手に生きてきたも
 のである。

誕生日などのプレゼ
 ントにしても、ベル
 ト、シーバー、カー
 デイガン、靴下など毎
 年、私が「有り難い」
 と思うものをくれる。

一方、私の方は忘れて
 いることが多い。
 本当の妻の何を知っ
 ているだろうか。確か
 なことは信仰を大切に
 し、花が好きだとい
 うことぐらいしかない。

〈心の巡礼〉

教会の掲示板の紙を
 妻は一生懸命に見て
 いた。そこには八日間
 の黙想の案内があった。
 きっと参加したいに

違いない。黙想とは字
 のごとく一人静かに黙
 つて想い、祈ること。

夫婦で参加してよい
 のだろうか？黙想を指
 導する神父に電話で聞
 くと、全員個室なので
 問題なしという返事。

八日間といつても、
 前日の夕食から始ま
 り、黙想の終わったあ
 との翌朝の食事までな
 ので実際には十日間。
 こんな体験は二人とも
 一度もない。

「参加しよう」と言
 うと喜んだのは言うま
 でもない。多少は妻の
 気持ちもわかる。黙想
 は心の巡礼のようなも
 のであろう。

八日間の黙想は、神
 父やシスターは年に一
 回、ほとんどの人がし
 ているものである。

生涯独身で神への奉
 献生活を送るために必
 要なのだろう。修道者
 としての霊性を深める
 ためにも。しかし、一
 般信徒も、ゆつくり自
 分を見詰めなければ、

修道者の信仰になつて
 しまう。

ただ社会人で十日間
 の休暇を取ることは困
 難である。その点、六
 十五歳で勤めをやめて
 自由の身になつたのだ
 から、妻のためには必
 要と思えた。

〈長束黙想の家〉

場所は広島市安佐南
 区長束にあるイエズス
 会の長束黙想の家。定
 員は十人だったが、参
 加してみると八人。シ
 スターが五人、信徒三
 人、男性は私一人であ
 った。

午前中一回、午後一
 回、指導司祭の講話を
 聴き黙想する。その他
 朝の祈り、ミサ、夕の
 祈り、寝る前の分かち
 合いの繰り返し。これ
 以外の時間は図書室で
 本を読もうが、裏山に
 散歩に行こうが、寝よ
 うが自由である。

沈黙が原則で、食事
 も祈りということで、
 沈黙の中、流れてくる

黙想の家のそばにある



イエズス会修道院

音楽を聴きながら食事
 をする。

私には、この沈黙の
 中での食事が新鮮で、
 一つ一つの食べ物を味
 わい、作った人のこと
 などを想像しながら一
 口々々味わって食べ
 た。

〈沈黙の中に あるもの〉

この巡礼記の第三話
 で、沈黙を中心に祈り
 と労働の生涯を過ごす
 観想修道会、カルメル
 会のことにふれたが、
 修道者だけでなく、
 我々一般人も、沈黙の
 中にあるもの、沈黙・

黙想の必要性を強く感
 じさせられた。

物資の豊かな今の社
 会は、スピード、便利、
 けん騒、明るさの中で
 生活することに慣れて
 いる。この逆に貧し
 く、ゆつくり、誠実に、
 沈黙の中で生活するこ
 との大切さとともに、
 サビエルがもたらした
 信仰が何であるかを考
 えさせられた。

そして、これから
 日々の生活をどう生き
 るかを問われたのであ
 る。
 （元山口放送取締役ラ
 ジオ局長）

純和風の黙想の家



きっと参加したいに